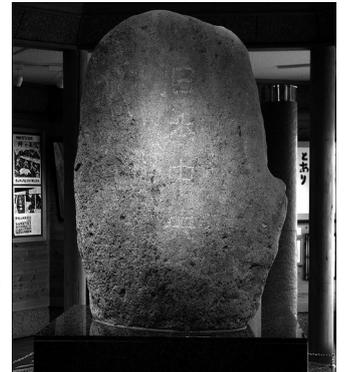


日本中央の碑（にほんちゅうおうのひ：右の写真）

青森県上北郡東北町字家ノ下タ 39-5

### 要約

日本古代史の中でも屈指の謎を持つのが「日本中央の碑」です。その典拠は意外に古く、歌学者の藤原顕昭（けんしょう）が出した『袖中抄しゅうちゅうしょう』に「陸奥には“つぼのいしぶみ”という石碑があり、蝦夷征討の際に田村将軍（坂上田村麻呂）が矢筈(やはず)を使って“日本中央”という文字を刻んだものである」という一説があります。それ以降、東北の歌枕として和歌の中に使われ、また幻の遺跡として考えられてきたという事です。



江戸時代には宮城県の多賀城の碑が“つぼのいしぶみ”とされていましたが、明治9年の天皇の東北行幸に際して、宮内省から青森県に“つぼのいしぶみ”発見の要請がありました。そこで田村麻呂が石を埋めたという伝承の残る千曳神社で大掛かりな発掘作業が行われたが、結局発見には至りませんでした。

ところが昭和24年6月に、その千曳神社近くの青森県東北町石文（いしぶみ）という所から突如として「日本中央」と刻まれた石碑が出土しました。発見された場所が“石文”であり、またそのすぐそばには“都母（つぼ）”と呼ばれる地域があることが“つぼのいしぶみ”という別名と一致するなどの根拠もあって、現在のところ最有力候補という位置付けをされています。

しかしこの碑の最大の謎は、ここに刻まれた文字「日本中央」です。なぜこのような文字が日本の最北部に当たる青森県に置かれたのでしょうか。蝦夷征討の際に刻まれたという逸話から考えると、その時まだここは「日本」の領土ではなく、時期は「日本」という国号は近畿王朝圏で使われはじめた頃と考えられます。さらに付け加えると、この碑を刻んだとされる坂上田村麻呂はこの地まで遠征していないとされています。後任の征夷大將軍・文屋綿麻呂がはじめてこの地域一帯まで足を運んだのが史実です。

一説によると“田村麻呂はこの先にある北海道や千島列島までを日本の領土とみなして、ここを中央と確定した”という説もあり。これには、国威発揚的発想であると云う批判もあります。だが実際のところ、ここに刻まれた“日本”という文字は“ひのもと”と読ませ、平安初期の文献によると“東北地方”一帯を指す言葉として使われていたという事です。

つまり、この「日本中央」とは、坂上田村麻呂以下の蝦夷征討軍が敵地の中央部分に当たる場所としてマークしたポイントという意味と捉えるのが妥当だろう。というのが現在の大方の意見というか通説となっています。…本当か？日本と中央について考えます。

解説：日本中央の碑歴史公園：昭和 24 年に川村種吉が発見してから長らく簡素な祠だけの雨晒しになっていたが、平成 7 年に発見地近くに公園施設を作り、そこに保存館を設けて保存している。入場無料。



解説：藤原顕昭：1130?～1209?。平安末～鎌倉初期の歌僧。六条藤家の中心的存在として活躍（本人は藤原氏の出身ではなく、養子として姓を賜う）。当時最高峰の歌合と言われた「六百番歌合」にも参加。『袖中抄』は文治年間（1185～1190 年）に出されている。

解説：つぼのいしぶみ：歌枕。和泉式部・寂蓮・西行・慈円などが詠む。「遠くにあるもの」や「どこにあるか分からないもの」という意味で使われることが多い。

解説：多賀城碑：江戸時代初期に発見された古碑。発見当初より“つぼのいしぶみ”であるとされてきた。松尾芭蕉が『奥の細道』で“つぼのいしぶみ”と記しているのは、この碑のことである。（右の写真）



解説：坂上田村麻呂：758～811。平安初期の武官。797 年に征夷大將軍に任ぜられ、蝦夷征討の最高責任者となる。801 年に遠征を行い大勝、翌年に胆沢城（現・岩手県奥州市）建設、さらに次の年に志波城（現・岩手県盛岡市）を建設する。東北地方の多くの社寺の創建伝説、またその他の伝承に多数登場するが、そのほとんどは後年の創作とされる。

解説：文屋（文室）綿麻呂：765～823。平安初期の武官。810 年の葉子の乱で葉子の側に付き捕縛されるが、坂上田村麻呂の助命嘆願により救われ、田村麻呂の軍に加わって功を上げる。811 年に征夷將軍（大將軍ではない）に任ぜられ、蝦夷の爾薩体と弊伊（現・青森南東部から岩手県北部）を平定する。

解説：国号「日本」：『古事記』ではヤマトを「倭」とのみ示し、「日本」と書かれることが全くありません。一方、『日本書紀』では逆に、ヤマトを大部分「日本」と記します。非常に対照的で対称的です。 思えば、卑弥呼についての記載で有名な『魏志』倭人伝など、中国の書物でヤマトを示すときには、「倭」ばかりが使われているような気がします。しかしながら、中国の歴史書でヤマトがどのように示されているかを見てみると、

『後漢書』倭      『三国志』倭      『宋書』倭      『隋書』倭  
『旧唐書』倭・日本   『新唐書』日本   『宋史』日本   『元史』日本   『明史』日本  
と、『旧唐書』を境に「倭」と「日本」とが分かります。『旧唐書』は中国の王朝「唐」の時代の歴史を記したものですから、つまり、唐代に「倭」が「日本」になった、ということです。おおむね西暦 700 年を過ぎたくらいの時代です。日本国内の資料では、いつから「倭」が「日本」になったのかがはっきりと記されたものがみあたりません。そのため、中国の資料から「日本」の使用開始時期を探らざるをえません。上にみたとおり、唐代に「倭」が「日本」へと変換したことは明らかです。

しかし「日本中央」とは、不可思議な“碑”と云えます。

「日本中央」… たった四字、それだけの碑。まさに、最短の石碑ではないでしょうか。

故古田武彦氏によりますと古代東北の研究者を悩ませているテーマ、それは「二つの壺碑（つぼのひ）」問題があると云います。二つの史料をあげます。

A いしぶみのけふのほそ布はつはつにあひみても猶あかぬけさかな

（『堀河百首』〈一一〇二～〇五頃成立〉所収の藤原仲実〈一〇五七～一一二八〉の作）

B 壺碑 市川村多賀城に有。

つぼの石ぶみは、高さ六尺余、横三尺計歟（ばかりか）。  
苔を穿（うちが）て文字幽（かすか）也。四維国界之數里をしるす。

【多賀城碑 銘文】

里程記載部分のみ抜粋

去 京一千五百里  
去 蝦夷国界一百廿里  
去 常陸国界四百十二里  
去 下野国界二百七十四里  
去 鞆国界三千里

「此城、神龜元年、按察使（下略）」と有。聖武皇帝の御時

に当れり。（中略）爰（ここ）に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲（けみ）す。行脚の一徳、存命の悦び、羈旅（きりよ）の勞をわすれて、泪（なみだ）も落つるばかり也。（松尾芭蕉『奥の細道』元禄二年〈一六八九〉五月八日）

Bは、多賀城（銘文参照）碑です。これを芭蕉は「つぼの石ぶみ」と呼んでいます。

しかも、右の（中略）部で、彼は、次のように文をのせています。

「むかしよりよみ置る歌枕、おほく語り伝ふといへども、山崩川流て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り、代変じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰（ここ）に至りて疑なき千歳の記念…」と、のべている。

すなわち、芭蕉はAの歌の中に出てくる「いしぶみ」をもって、この多賀城碑に比定したと考えられます。確かに芭蕉のいう通り、この「いしぶみ」は代々の和歌の中に登場しています。これらは、平安時代から鎌倉時代にかけての歌であり。ことに、平安中・後期から鎌倉初期にかけてのものが多。ということは、ほぼ“共通の時間帯”に詠まれたものと思われ。つまり、これらは「同一の概念」、「同じ石碑」を指す。そういう可能性が高いと考えられます。なぜなら同じ“時代”に、それぞれがあちこち、まちまち、思い思いの「石碑」を想定し、それを「歌枕」にして歌を詠む、などという事は、ちょっと考えにくいことだからです。

では、その「石碑」はどれなのか。その答は、青森県の「日本中央碑」だと思われ。芭蕉の考えたような「多賀城碑」ではなかったと考えられます。次にその理由は、

- (1) 日数経てかく降りつもる雪なればつぼの碑跡やたゆらん  
（懷円〈十一世紀初頭〉作。『歌枕名寄』に「良玉集」より転載）
- (2) いしぶみのけふのほそ布はつはつに逢見ても猶あかぬけさかな  
（仲実。 一一前出）
- (3) いしぶみやつかろのをちにありときくえぞ世の中を思ひはなれぬ  
（清輔。十二世紀中頃の歌人。藤原顕昭〈後出〉の兄。  
『清輔朝臣集』および『夫木和歌抄』所載）

- (4) むつこの奥床しくぞ思ほゆる壺のいしぶみそとの浜風  
(西行。十二世紀後半。『山家集』)
- (5) みちのおく壺のいしぶみ有ときくいづれか恋のさかひ成らん  
(寂蓮。十二世紀後半。『夫木和歌抄』)
- (6) おもひこそ千嶋のおくを隔てねどえぞかよはさぬ壺のいしぶみ  
(顕昭 一一後出。『六百番歌合』「遠恋」)
- (7) 思ふこといなみちのくのえぞ云はぬ壺のいしぶみかき尽さねば  
(慈円 一一次の歌と共出)
- (8) みちのくのいはで忍ぶはえぞ知らぬかき尽してよ壺のいしぶみ  
(頼朝。慈円との贈答歌。建久六〈一一九五〉年、『拾玉集』〈慈円の歌集〉  
および『新古今和歌集』)
- (9) みちのくのつぼのいしぶみかき絶えてはるけき中となりけるかな  
(阿仏尼。『うたたねの記』〈十三世紀〉)
- (10) 請ひかば遠からめやは陸奥の心尽しのつぼのいしぶみ  
(『仙台金石志』〈安政四=一八五七年成立〉に和泉式部作として掲載。ただし、宗祇の  
『名所方角抄』所載では、作者名なし) 一一以上、安倍辰夫氏「壺碑」による。

「日本中央碑」こそ「壺の石碑」だと考えられます。

第一に、清輔の歌(3)を見ると、そこには明白に「つがる(津軽)のをち(遠地)」とある。この表現にふさわしいのは、宮城県の高千穂城碑ではなく、青森県の「日本中央碑」の方であると思います。これに対して、「『つがる』といっても、現在の青森県地方に限らず、東北地方全体を指したのだろう」といった見解がありますが、これは無理です。

これは、ちょうど、『古事記』の神代巻の「天孫降臨」項にある、

筑紫(つくし)の日向(ひなた)の高千穂の久士布流多気(くしふるたけ)に天降りましき。

の一節の「筑紫つくし」に対して、“九州全土”の意味に解釈して、強引に“宮城県と鹿児島県の県境(高千穂山・霧島連峰)”へと持っていった、本居宣長の手法と同じで、そのような強引な読解法の背景には、今では、「近畿天皇家を、天照大神の直系の子孫と解釈したい」という、イデオロギー的欲求がある(あった)ものとの批判があるからです。

なぜなら、「神武東征(いわゆる『東侵』)」の出発地が「日向国(宮城県)」である以上、「天孫降臨地」を、同じ日向国近辺としなければ、「天照→神武」をストレートに直結させることができなくなります。しかし 上記は、表記法上からも、考古学的分布との対応からも、従来降臨地として“推定”されていた宮崎・鹿児島県境ではなかったと云われています。

これは福岡県の高祖(たかす)山連峰(日向(ひなた)峠・日向山・日向川等あり)のクシフル峯(だけ)だったと解釈されています。

いわゆる、筑紫(つくし)の日向(ひなた)の高千穂の久士布流多気(くしふるたけ)です。なぜなら筑紫の国と言ってますので、日向の国ではない訳です。下記の解説参照のこと。

解説：九州地方の呼称「西海国（9国2島）」

肥後の国が所属しました九州地方は西海道（さいかいどう）と呼ばれ、大化改新以前は、筑紫、西偏（古事記）、西州（神代紀）また西道（崇神紀）と呼びました。

◆四ヶ国時代 ＊大化改新以前の古代には西偏、西州と呼称。

1. 火の国 肥後 肥前
2. 筑紫の国 筑前 筑後
3. 豊の国 豊前 豊後
4. 日向の国 日向 大隅 薩摩

◆西海国時代

＊701年 大化改新 「続日本書紀」 元明天皇 大宝元年

筑前	ちくぜん	筑後	ちくご		
肥前	ひぜん	肥後	ひご		
豊前	ぶぜん	豊後	ぶんご		
日向	ひゅうが（ひむか）	大隅	おおすみ	薩摩	さつま
壱岐	いき	対馬	つしま		

◆現在の県との対照(西海道)

福岡	筑前	筑後	
大分	豊前	豊後	
佐賀	肥前		肥前を佐賀と長崎に分離した。
熊本	肥後		
宮崎	日向		当初、701年には日向、大隅、薩摩で構成されていた、
長崎	壱岐	対馬	長崎は肥前の一部と2島
鹿児島	薩摩	たね島	大隅

713年日向国から大隅国が分離されました。  
824年 たね島が廃止され大隅国に編入。

沖縄 琉球

（本文の続き）これは「上記の天孫降臨」と同じ方法です。ですから話を戻しますと、「『つかろ』は津軽に限らず」とするのは、やはり（先入観）ある議論だと思います。そうでなければ、「東北地方全体を津軽と称した」「遠隔地はすべて津軽と呼んでいい」、そういう主張があるなら、その確かな用例群を列記して説明するべきです。だが今まで史学界にそれはありません。

第二、今まで二度出てきた、顕昭。彼は清輔の弟で、この顕昭が冒頭に出した藤原仲実の歌（A。また(2)）に対して、次の注を付しています。

「顕昭云（いわく）。いしぶみとは陸奥のおくにつぼのいしぶみ有り。日本の東のはてと云（い）へり。但し田村の將軍征夷の時弓のはずにて石の面に日本の中央のよし書付けたれば石文と云ふと云へり。信家の侍従の申ししは、石の面ながさ四、五丈ばかりなるに文を糸り付けたり。其所をつぼと云ふなり。（それをつぼとはいふなり）。私いはく。みち

の国は東のはてとおもへど、えその嶋は多くて千嶋とも云へば、陸地をいはんに日本の中央にても侍るにこそ」

この注については、「顕昭は、この『つぼの石文』を『日本中央碑』と見なしている」。と云えます。だとすれば、先の清輔は、この顕昭の兄であるから、その歌の「つかろ」は、やはり津軽の意と解して、さしつかえがないと考えられます。とすれば、この「つかろ」を“東北地方全体”や“遠隔地”の意に拡大ないし“臆化（おぼろげにする）”して、「この歌からでは、『つぼの石文』がどれであるか、指定できない」という主張は、やはり無理なのです。万一、「兄と弟と、主張が同じとは限らない」などといって、“兄弟分離策”に奔ろうとする人がいたなら、いよいよフェアな解読法とは云えなくなってしまいます。

第三に、決定的な証明があります。それは次の点です。

「天平宝字八年（七六四）～永禄（一五五八～七〇）の中頃、以降」の間は、多賀城碑は地上に存在しなかった。——このレッキたる「事実」です。

最初の時点は、恵美朝葛\*誅滅の時です。創建された多賀城碑は、わずか「二年間」で、その偉容を没した。なぜなら、朝葛\*顕彰碑、しかも「自画自賛」碑の性格をもつ、この碑が、彼の「逆賊」として公認された当年（天平宝字八年）以後、なお地上に「健在」だった、とは到底考えられないからです。そのさい、字面が削平されず、埋没されたにとどまったのは、土地の人々の、そして新任の責任者（田中朝臣多太麻呂か、陸奥守従四位、兼鎮守將軍）の“思いやり”だったのではないかと考えられます。

以降、八百年間、多賀城碑は地中に埋没し、“人目から姿をかくし”てきました。

解説：藤原朝狩（ふじわらのあさかり）は、奈良時代の公卿。名は朝獵、朝獺とも記される。氏姓は藤原朝臣のち藤原恵美朝臣。藤原南家、大師・藤原仲麻呂の四男。官位は従四位下・参議。そして天平宝字6年（762年）朝狩は多賀城の大規模改修を行い、その記念碑として多賀城碑（天平寶字六年歲次壬寅参議東海東山節度使従四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原恵美朝臣朝獺修造）を建てている。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

朝葛\*（あさかり）の葛\*は、けもの編に葛。JIS 第三水準ユニコード 5366

A 奥州宮城郡二坪石文ト云名所ハ古ヨリ其名高ク侍リ…又去ル永禄（一五五八～七〇）ノ中コロ彼石文ノアタリヲ其隣里ノ農人畑ヲウタントテ土を掘カヘシケルニ不思ニアヤシキ石ヲ掘出シケル…（『文禄清談』寛政七年〈一六六七〉書写本。文禄は「一五九二～九六」）

B 近き比ほひ、陸奥の国宮城の郡の土の中より出たりし碑も。其文字はわきまふべけれど、其体は又さだかならず。

[割註]万治・寛文の間（一六五八～七三）、土の中より出しよしを云なり…

（新井白石『同文通考』巻二、八分飛白〈正徳年間＝一七一―～一六〉）

上のA及びBは、いずれも、多賀城碑「再出土」に関する所述であるが、両者、約一世紀の“誤差”があります。けれども、当碑「再出土」所伝は、Aを上限とする。すなわち、

この時期以降、ことに江戸時代になって喧伝され、芭蕉も、これを訪ねたのでした（元禄年間〈一六八八～一七〇四〉、水戸光圀が仙台藩に対し、当碑保存勸奨の書簡を贈ったことは有名です）。

従って、先にのべたように、「天平宝字八年から、少なくとも、『永禄』時点までは、当碑は地上になかった」——そのように見なす他にありません。

とすれば、今問題の「平安中・後期から鎌倉まで」の間に、歌枕に歌われた「壺の石文」は、“地上に存在せぬ”この多賀城碑であるはずはなく。もし、かつて地上に存在した「二年間」（天平宝字六～八年）の記憶だったとしたなら、それが平安中・後期になって、いきなり歌に現われるとは、不可解と云わざるを得ません。だからやはり「壺の石文＝多賀城碑」という、芭蕉の判断はまちがっていたと考えざるを得ません。

「日本中央」という四字も、うすく、かつ、絵取り（えどり）直された感じで、ぐるりと、四囲をまわって観察しても、他に何も無い。文字も、形ある刻みも、一切ない。

もちろん、建碑者の名前、建碑時点、そして建碑の由来などもない。表記の四文字の簡明さはいいとしても、それだけでは、いくら何でもひどい。「石碑」の体（てい）をそなえていないのではないか。「あの、石碑の裏に、何かあったのではないのか」ことに、表記の四文字は、単なる道路標式ではない。とすれば、そのような、建碑者が、何も、自分の名前を“隠す”必要はなく。建碑時点を“あいまい”にする必要もない。むしろ、それを「明記」するはずだと考えられます。

なぜ、ここが「日本中央」なのか、簡潔に注記するはずです。

「～より、～に至る、云々」と書けば、容易にその意志は表明され、何よりも、「～所在の誰々」という、建碑者の名前が、その意志を告げるはずです。

「あの石碑は、裏面が削られたのではないか。」あらためて観察してみると、裏は、やはり、石の地肌ではなく、「削平」のあとがありました。もちろん、その原因は不明ですが、自然の力による「削平」つまり“崩れ落ち”か、それとも、人工による「石碑としての造型」のための「削平」か、あるいは、「後代人による、文字湮滅（いんめつ）という改竄（かいざん）」のための「削平」か。一切不明です。

けれども、ともかく、「自然の、石の地肌ではない」、ことは確認できました。

先に挙げた「平安・鎌倉期の十首」中に、気になる表現があります。

慈円と頼朝の贈答歌に

(7) 「…壺のいしぶみかき尽さねば」(慈円)

(8) 「…かき尽してよ壺のいしぶみ」(頼朝)

いずれも、共通してふくまれている趣旨、それは“「壺のいしぶみ」は、書き尽くされていない”というテーマと考えられます。もちろん、ただ「ふみ(書簡)」の枕詞のように「壺の石文」を利用しただけ、という見方もありますが、やはり両首に共通した趣意は、「壺の石文」そのものに対する認識を背景としている、そう考える方がすじではないでしょうか。

つまり、兩人の目には、この石碑が、「日本中央」とだけあって、何の“趣意解説”もない、その事実を知っていたからこそ、この贈答歌となったのであって、少なくとも、そう考えたとき、「壺の石文（＝日本中央碑）」をここに“借用”した、その手法はきわめて適切だったと考えられます。

以上の考え方に誤りがなければ、鎌倉初期における当碑の姿は、わたしたちが現在見ているものと大差なかったと思われま

ところが、これとは、一種、趣を異にしたもの、これが(10)の「伝、和泉式部作」の歌。

「…心尽しのつぼのいしぶみ」 ここには、「書き尽くされていない。残念だ」といった、慈円・頼朝贈答歌とは逆に、「心尽し」と表現されている。“日本中央碑は、心が尽くされていみ”というのだ。

これはなぜか。この歌を、『仙台金石志』（安政四年〈一八五七〉成立）は和泉式部の作としてあげている。これが正しければ、(1)～(10)中、「最古の歌」となりますが、『仙台金石志』に先行する『名所方角抄』（宗舐）には、作者名がない。

「したがって年代も作者も不明の歌としておこう」と、安倍辰夫氏は書いています。穏当な判断です。

実は、この「日本中央碑」に対して、明解な注解を書き残した、江戸時代の学者がおります。寛政年間（一七八九～一八〇一）に活躍した、津軽藩の学者、秋田孝季（たかすえ）です。注目の一節を紹介します。

#### 「第七十一番 都母の石碑

都母の石碑は、北斗の領極むより、糖部都母の地ぞ、日本中央たりとて、安倍致東が建立せり。角陽国、神威茶塚国、流鬼国、千島国、日高渡島国、奥州、筑紫、琉球島を数へ、日本中央と刻せりといふ。よって、名久井岳を日本中央山とも称す。秋田 孝季」  
〈「安倍安東秋田氏遺跡八十八景」〉 上記の文は、「日本中央碑」に対する解説です。

最初の「角陽国」については、当書に次の解説があります。

#### 「第一番 神威茶塚国北方角陽国

荒覇吐族、古来より海を恐れ、また崇むるに、舟を造りて、この国に渡り、永住せし民あり。氷海を渡りしは、トナリとぞいふ皮舟にて、海獣および大鯨を狩る。

この国にては、日輪、角光せるとぞあり。夜虹ぞ光走す。一年をして、白夜、常夜あり。神の歳は、人間の一年を一日昼夜にせる故とぞいふ。 秋田 孝季」

この「神威茶塚国」は、カムチャッカ半島であるから、その北方の「角陽国」は、アラスカである。その描写には、その土地に対する「認識」が反映している。

その「角陽国」を北限とし、「流鬼国」（樺太。右の第三番に記す）や「日高渡島国」（北海道。第四番等に記す）と共に、南の「筑紫・琉球島」に至る地域、その「中央」に当るのが、「奥州」の、この地（糖部都母）だ、というのである。 其上、当碑の建碑者の名前まで「安倍致東」と明記されています。

この人は、秋田孝季によれば、あの「安倍貞任」（後三年の役で源義家に敗れた。一〇一九～六二）の、約十一代前になる。だとすれば、八世紀末～九世紀の人物であることになります。すなわち、近畿天皇家が東北地方の北半を征圧しようとしている、十～十一世紀より前の段階の人物と考えられます。

次に 安倍日之本將軍系累を記述します。

二百十九代安国	二百二十代安東	二百二十一代致東	二百二十二代東長
二百二十三代長宗	二百二十四代長国	二百二十五代安堯	二百二十六代安治
二百二十七代国東	二百二十八代国長	二百二十九代頻良	二百三十代頼良
二百三十一代貞任	二百三十二代高星	二百三十三代高暁	二百三十四代高恒
二百三十五代堯秀	二百三十六代堯恒	二百三十七代恒秀	二百三十八代貞季
二百三十九代貞秀	二百四十代堯治	二百四十一代堯東	

孝季は、稀代の記録書写、伝存者であっても、決して“創作者”ではなかった。けれど孝季の書写、伝存した記録・史料が、そのまま歴史の真実を語っているかどうか。それは未定です。なぜなら、彼の執筆した文書（自筆、再写本をふくむ）の大半はまだ未公開であり、その点を実証的に確認するすべが今はないからです。

従って、基本的には、右の孝季の記載が真実を語っているかどうか、それに対する客観的判断は「保留」とせざるをえない事となります。

解説：『東日流外三郡誌』（つがるそとさんぐんし）は、古史古伝の一つで、古代における日本の東北地方、特に現在の青森県のほか岩手県、秋田県を含む北東北などの知られざる歴史が書かれているとされていた、いわゆる和田家文書を代表する文献。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

『注：東日流外三郡誌は（方針として）、記録書写した事について、相反する事が書かれていた場合、そのまま書写し、客観的判断を保留して後世に委ねるとされています』

解説：前九年・後三年の役 平安末期，奥羽で行われた二大戦役。

（１）前九年の役。陸奥(むつ)の安倍頼時(頼良)が陸奥(むつ)の奥六郡(おくろくぐん)を領しながら、賦貢・徭役(ようえき)を納めなかったので、1051年朝廷は源頼義・義家父子を派遣して討伐させた。一時頼時は帰順したが、1056年再び乱を起こし、頼時死後も、その子貞任(さだとう)・宗任(むねとう)の勢力が強かったので、頼義は1062年出羽(でわ)の豪族清原武則(たけのり)らの援助を得て、ようやく鎮定した。

（２）後三年の役。前九年の役後，清原武則は鎮守府(ちんじゅふ)將軍として安倍氏の旧領を合わせて威を振るったが、1083年清原氏が内紛を起こしたので、源義家が苦戦の末1087年清原家衡・武衡らを平定した。これにより源氏は東国に確固とした基礎を築いた。

→安倍貞任／安倍宗任 出典:百科事典マイペディアの解説

『日本書紀』の「肅慎国」について考えます。

三月（やよひ）に、阿倍臣（あへのおみ）名を闕（もら）せり。を遣（つかは）して、船師（ふないくさ）二百般を率（ゐ）て、肅慎（みはせし）国を伐たしむ。阿倍臣、陸奥（みちのく）の蝦夷（えみし）を以て、己が船に乗せて、大河（おおかは）の側（ほとり）に到る。是に、渡島の蝦夷一千余、海の畔に屯聚（いは）みて、河に向ひて営（いほり）す。営の中の二人、進みて急に叫びて曰はく、「肅慎の船師多に來りて、我等を殺さむとするが故に、願（こ）ふ、河を濟（わた）りて仕官へまつらむと欲ふ」といふ。

阿倍臣、船を遣して、兩箇の蝦夷を喚し至らしめて、賊（あた）の隱所（かくれどころ）と其の船数とを問ふ。兩箇（ふたつ）の蝦夷、便ち隱所を指して曰はく、「船二十余艘なり」といふ。即ち使を遣して喚す。而るを來肯（まうきか）へず。阿倍臣、乃ち綵帛（しみのきぬ）・兵・鉄等を海の畔に積みて、貧（ほし）め嗜（つの）ましむ。肅慎、乃ち船師を陳ねて、羽を木に繋けて、挙げて旗とせり。棹を齋めて近づき來て、浅き処に停りぬ。一船の裏より、二の老翁を出して、廻り行かして、熟積む所の綵帛等の物を視しむ。便ち単衫（ひとえきぬ）に換へ着て、各布一端を提げて、船に乗りて還去（かへ）りぬ。俄（しばらく）ありて老翁更來て、換衫を脱き置き、并て提げたる布を置きて、船に乗りて退りぬ。阿倍臣、數船を遣して喚さしむ。來肯へずして、弊賂弁（へろべ）島に復りぬ。食頃（しばらく）ありて和（あまな）はむと乞す。遂に聴し肯へず。弊賂弁は、渡島の別。己が柵に拠りて戦ふ。時に、能登臣馬身龍（むまたつ）、敵の為に殺されぬ。猶戦ひて未だ倦（う）まざる間に、賊破れて己が妻子（めこ）を殺す。

（岩波日本古典文学大系『日本書紀』「齊明天皇六年」）

上記についての分析は、先ず、この「阿倍臣」が船師二百艘を率いて攻撃した、という「肅慎国」とはどこか。この国名は、歴代の、中国の史書に出現する、著名な国だ。その史料をあげると。

- (1) 成王既に東夷を伐ち、肅慎來賀す。（『尚書』序）
- (2) 肅慎・燕亳、吾が北土なり。  
〈注〉肅慎は北夷。玄菟の北、三千余里に在り。（『左氏伝』昭王、九）
- (3) 是に於て肅慎氏、[木苦]矢に貢す。（『国語』魯語下）
- (4) 肅慎の国、白民の北に在り。（『山海經』海外西經）
- (5) 肅慎は、今の悒\*婁なり。（『漢書』東夷伝）悒\*婁（ゆうろう）の悒\*（ろう）は立心偏の代わりに手偏に邑。JIS 第三水準、ユニコード 6339
- (6) （悒\*婁）古の肅慎氏の国なり。（『三国志』魏志悒\*婁伝）
- (7) 肅慎氏、一に悒\*婁と名づく。不咸山の北に在り。夫余を去る、六十日行なる可し。東、大海に浜し、西、冠漫汗国に接し、北、弱水に極まる。其の土界、広袤數千里。（『晋書』肅慎氏）
- (8) 靺鞨、蓋し肅慎の地。後魏、乏を勿吉と謂う。京師の東北、六千余里に在り。東、海に至り、西、突厥に接し、南、高麗に界し、北、室韋に鄰す（『旧唐書』靺鞨伝）。

右のように、周代以来、連綿と、この「肅慎」の名が出現しています。いわば、アジア大陸、東北方の名門で、その上、注目すべきは、「東、海に接す」とされている点。この

「海」とは、もちろん、日本海であり。つまり、沿海州。日本列島の、いわば“お向かいさん”なのです。

さらに注目すべきこと、それは(7)の『晋書』は唐代(房玄齡、五七八～六四八)の成立、七世紀中葉に書かれた本です。そこで「肅慎氏」という標拳(伝名)が行われているのを見れば、同時期(齊明紀)の「阿倍臣の討伐対象」として、この「肅慎」の名が使われているのも、うなずけるところです。

当然ながら、この(齊明紀の)肅慎は、沿海州一帯を古くより領有してきた、古代中国の史書以来、著名な肅慎なのです。

「大河」とは、肅慎の中のどこか。旭大な領域とある。だが、この史料には、貴重なキーワードがひそめられていました。それは「大河の側(ほとり)に到る」の中の「大河」です。幸いにも、広大な沿海州の日本海岸に、「大河」は一つしかありません。黒竜江です。ウラジオストックには、「大河」はありません。同じく、「黒竜江の河口～ウラジオストック」間にも、他の「大河」は存在しません。従って、一見“とりとめのない普通名詞”に見える、この「大河」は、十分な特定力をもっていると言えます。

それだけではなくて。この「大河」は、普通名詞ではなく、固有名詞である可能性すらありそうです。なぜなら、沿海州側のみならず、朝鮮半島(東岸)側、日本列島(北岸)側をふくめて、要するに、日本海圏全域を通じて、ピカーの特大河川、それはたった一つ。この黒竜江以外にはないからです。

わたしたち日本人の目には、“大きな川”に見える江の川(中国地方)や信濃川(中部地方)なども、この黒竜江に比べれば、まさに“ちっぽけな川”にすぎない。要するに、黄河や揚子江のある中国大陸において、ようやく比肩の“相手”をもつ。全日本海圏では、比肩の“相手”がないのです。

このように考えてみると、一方で、日本海対岸の重要な一大関門、ウラジオストックについて、「北門(きたど)」と呼んできた古代日本人が、他方で、この北端の一大長流を「大河(おおかわ)」と呼んでいたとしても、何の不思議もないと思われま

次に、「蝦夷」問題です。「阿倍臣の率いた船師二百艘」の正体は何か。これも、本文を正確に読むと明白です。「阿倍臣、陸奥の蝦夷を以て、己が船に乗せて、大河の側に到る」右にのべている通り、「阿倍水軍は、すなわち、蝦夷水軍」なのです。いいかえれば、この「阿倍臣」とは、「陸奥の蝦夷のリーダー」だと言っても良いと思われま

次に、「渡島の蝦夷」。これは、当然「北海道の蝦夷」です。今は、「渡島(おしま)」という、北海道の南端部、函館を南端とする半島部を指す地名だが、しかし、本来は、北海道全島を指した地名であったと推測されます。

なぜなら、「半島は『島』ではない」からです。と、考えてくると、この「渡島の蝦夷」とは、ズバリ言って、“古代アイヌ族”であり、少なくとも、その概念と深い脈絡をもつ人たちであると考えられます。

この人々が、黒竜江の河口に、「一千余」も集まっていたことも不思議ではありません。

なぜなら、北海道と黒竜江の中・下流域とが、二万年前、まさに旧石器の時代から、延々たる一大交流を行ってきたことは、すでに、黒曜石の十勝石の分布が証明しています。ならば、黒竜江の河口を「拠点」として、交流しているのは、自然なことです。

解説：十勝石っていったい何者？

実は正式名称は「黒曜石（こくようせき）」で、主な産地は北海道のほか、佐賀や大分、長崎、熊本などの九州地区、長野、伊豆などにもありますが、日本一の原因産地はなんといっても北海道。その北海道内でも産地があり、白滝村、上士幌町の十勝三股をはじめとする十勝北部、置戸町、赤井川村が黒曜石の四大産地といわれています。しかしそのどこでとれたとしても、名称は「十勝石」と呼ばれており、北海道では「黒曜石=(イコール)十勝石」です。 出典：北海道ファンマガジン

解説：北海道に人が住みついたのは旧石器時代（およそ二万数千年前）とされるが、遠軽町白滝（旧白滝村）の白滝遺跡群は旧石器時代の遺跡としては日本最大規模の遺跡だ。白滝遺跡群からは、赤石山から採取した黒曜石を原料とした様々な石器が大量に発見され、この一帯が石器の製造場だったと思われる。

白滝産黒曜石は、南は三内丸山遺跡を含む北東北、北はサハリンやシベリアの遺跡からも発見され、本州・大陸と交易が行われていたことを物語っている。大陸とのつながりといえば、大空町女満別（旧女満別町）の豊里遺跡から、昭和32年に発見された石刃鏃（せきじんぞく）は、日本考古学界でも画期的な発見だった。石刃鏃とは、石を縦に剥いて作った石刃を鏃（やじり）にした鋭利な石器のことである。

これまでユーラシア大陸北部で広く認められていた石刃鏃が、日本列島では発見されていなかったのであるが、女満別ではじめて本格的発見がされ、これによって大陸と日本列島の石刃鏃文化が繋がったのである。 出典：オホーツク21世紀を考える会HPより

もっとも肝心のテーマ、それは、「阿倍臣」の身もとです。『日本書紀』を“信ずる”人は、この「船師二百艘」を「大和朝廷の軍勢」だと思っているかもしれません。

では、もし、これが、本当に「大和朝廷派遣の一大船団」だったとしたなら、なぜその全軍統率の中心リーダー（「阿倍臣」）の名前すら分からないのだろうか。「名を闕（もら）せり」と注記しなければならないのでしょうか。

しかも、時は、七世紀中葉で、八世紀初頭に成立した『日本書紀』にとって、わずかに半世紀前の「事件」です。（斉明六年は、六六〇。書紀成立（七二〇）の六十年前）。

もちろん、それでも下っ端の部将ならまだしも、中心の統率者の名前が分からないとは。“阿倍臣に当る人”とだけ分かって実名が分からないとは、いずれも“信じられない”話です。

回答は一つ。書紀の編者たちは、「他の文献」から、この資料を「引用」し、「転載」しただけで、その実体を知らなかったのです。

そして肝心なこと、それは、その資料が「大和朝廷内のものではない」と考えられる点です。でなければ、いくら「引用」や「転載」したとしても、当時の関係者やその子供たちに、その従軍の実際を聞けば、その中心統率者の「名前」ぐらい、簡単に判明すると思

われ、それが「分からない」ということは、すなわち、大和朝廷内に「その関係者は、いなかった」この帰結しかないのです。

この点、「史実かどうか分からない。おそらく造作だから」などといってみても、「逃げ道」にはなりません。なぜなら、もし、「造作」なら、「名を闕（もら）せり」などと書かず、誰々と、実在の誰かの人名なりを架空の作り物の人名なりを書けばすむことであり、そうでないのはやはり、「その事件はあったが、しかし、それは近畿天皇家内の事件ではなかった」という帰結、そう考えざるを得ないのです。

以上の帰結を読んで、まさか、とまどわれる方おられると思いますが。しかし『日本書紀』という歴史書の“読み方”として、今では、これは不可欠の「方法」と云われています。その証拠をあげます。 先ず、神功紀。そこには、

- a 卑弥呼（ひみか）の記事（三回。倭人伝より）
- b 壱与（いちよ）の記事（一回。晋の起居注より）
- c 朴堤上（ぼくていじょう）の記事（一回）

といった記事がある。a、bは、いずれも三世紀だが、当然、卑弥呼と壱与とは別人である。また朴堤上説話は、五世紀初頭の事件だ。だから、これらの記事や説話が、同じ「倭の女王」ないし「倭王」に関するものでないことは、明白です。なのに、神功紀は、委細かまわず、神功皇后その人の事蹟として、あるいは「引用」し、あるいは「叙述」しているのです。ちょっとこれは無理です。第一、神功皇后は応神天皇の母親ですから、四世紀中葉後半の人物であるはず。それが三世紀や五世紀の「倭王」を“兼務”できるはずはありません。その上、大事なこと、それは、次の三点です。

第一に、吉野ヶ里遺跡の発掘の結果などから、倭人伝の倭国の中心、すなわち卑弥呼・壱与の邪馬壱国は、北部九州（博多湾岸とその周辺）である可能性が大となった今、『日本書紀』が他（筑紫の倭国。九州王朝）の史実を「盗用」して、自己の「正史」を構成していることの可能性が出てまいりました。（注：三種神器が揃って発掘されているのは、北九州の5つの遺跡しかありません。）

第二に、この点、「朴堤上説話」も、例外ではなく。「倭国の都」の臨む海辺から、“夜から翌朝まで”の間に、新羅の慶州への海路（北鮮暖流）に乗じたことを語る、この説話の場合、大阪湾岸を脱出の出発点としたのでは、到底不可能。やはり、少なくとも、九州北岸、おそらくは博多湾岸あたりを「倭国の都」の地と考えなければ、スムーズに、現地の土地鑑に立つ理解はえられないと考えられます（『三国史記』『三国遺事』）。すなわち、「倭国の都」は筑紫であり、三世紀と変わっていないのです。

この点、『三国史記』『三国遺事』が、百近い「倭」の記事を載せ、その中には「卑弥乎（＝呼）」の記事までありながら、「倭都の変動（たとえば『東遷』）」を一切記していない、その史料事実とも、対応し、合致しているのです。

してみれば、ここでも、書紀という「正史」は、他王朝（先在王朝）たる九州王朝の史料を「盗用」していると考えざるをえないのです。

第三に、これらの手法は、決して「神功紀」だけの特例ではなく。六・七世紀段階においても、次々と発見された。たとえば、

- 1) 「大化・白雉・朱鳥」の“飛び飛び三年号”は、いずれも「九州年号」からの盗用であり、孝徳紀の「白雉説話」も、それと一連のものである。
- 2) 宣化紀の詔勅（宣化元年五月項）は、「磐井の詔勅」からの“換骨奪胎”すなわち、「盗用」である（「市民の古代」第十一集、新泉社〈東京〉刊、参照）。
- 3) 同じく、継体紀の詔勅（継体二十四年二月項）も、筑紫の君（九州年号の創始者）の詔勅からの「盗用」である（平成元年十一月、「市民の古代」〈大阪〉、「古田武彦と古代史を語る会」〈東京〉等で講演）。
- 4) 雄略天皇の遺詔（雄略二十三年八月項）は、隋の高祖の遺詔（高祖紀、仁寿三・四年項）の“換骨奪胎”、いわば「盗用」である（『日本古典文学大系』注記）

解説：朴堤上（ぼくていじょう）生没年不詳。5世紀初めの朝鮮、新羅（しらぎ）の智将（ちしょう）。新羅第18代の実聖王は日本と高句麗（こうくり）の求めにこたえて、前王奈勿（なもつ）王の子の末斯欣（みしきん）と卜好（ぼくこう）を質としてこの2国に送ったが、奈勿王の子で第19代の訥祇（とつぎ）王は、堤上に命じて質となった兄弟の帰国を凶った。堤上は、まず高句麗へ行き弁説巧みに卜好を獲得し、次に日本に渡り智略で末斯欣を帰国させたが、自らは斬殺（ざんさつ）されたと『三国史記』は伝えている。

出典：日本大百科全書（ニッポニカ）の解説

以上、驚くべき、しかも同一の手法が次々と判明してきたのです。このような、書紀の「編集の手法」からすれば、この「阿倍臣の肅慎攻撃」記事についても、同一の手法の發揮と見なして、何の不思議も有りません。

『日本書紀』には、“身元不明”の史書が再度出現している。

- (1) 『日本旧記』（雄略二十一年三月項、注記）
- (2) 高麗の沙門道顕の『日本世記』（齊明六年七月項、注記）

いずれも、「日本」に関する本でありながら、何天皇のとき、何年に、書かれたか不明です。『日本旧記』の場合は、著者も不明です。

しかし、古代の「史書」は必ず、当時の権力者と深いかわりがあり、その命によって作られることが多く、中国・日本などの場合、とくにその覬が深くなっています。

しかし、折角、その書名及び記事を出しながら、それらの歴史的成立の経緯を書かぬ、というのは不審であります。この不審に対する答、それは一つ。

「これらの史書は、近畿天皇家内で作られたものではない」

すなわち、先在王朝たる、九州王朝の史書、それがこの二書だったと考えられるのです。

右の二書中、後者（『日本世記』）は、齊明六年に当る記事が「引用」されています。とすれば、同じ年の「阿倍臣の肅慎攻撃」記事もまた、同一の史書（『日本世記』）から「盗用」したと考えることは、自然の道理ではないでしょうか。従って、

- (1) 『日本世記』は九州王朝の史書である。
- (2) 九州王朝は、自己のことを「日本」と称していた。

この二点の帰結を得ることとなりました。

『旧唐書』に次の、有名な記事があります。

或は曰（い）ふ。倭国、自ら其の名の雅ならざるを悪み、改めて日本と為す」（日本伝）  
『旧唐書』にいう「倭国」とは、九州王朝のことで、倭国伝の冒頭に、「倭国は、古の倭奴国なり」とあります。この「倭奴国」とは、後漢の光武帝から贈られた金印の国「志賀島」すなわち九州（筑紫）の王者の国を指している。ここの「倭国」とは、その後継王朝という事になります。その「倭国」が、みずから「日本」と改名した、とっています。という事は、のち（八世紀以降）に近畿天皇家がみずからを「日本」と称したとき、それは、“独創の国名”ではなく、「模倣」、あえていえば、九州王朝から「襲名」した国号であり、「日本」を最初に称したのは、九州王朝だったという事になってきます。

『隋書』倭国伝の注目すべき記事があります。

「その国境は東西五月行、南北は三月行にして、各々海に至る」この記事の解釈については、「この『東西五月行』が『九州』だけにとどまるものでなく、四国から九州へとつながる日本列島の全体を指していると考えられること。つぎの『南北三月行』は問題です。これは、つぎの南北に縦貫する線をいっていると考えられます。。

対馬――壱岐――九州――種子・屋久――奄美諸島（沖縄諸島）

『東西』の場合の『東端』が青森県までか、北海道までか。それともさらにその北や東北につらなる島々をもふくむか、それは明らかではありません。

（一方、関東地方まで、ということもありうるかもしれません。）

要するに、この一見“途方もない”表現に対して、多利思北孤（たりしほこ）が

A 日本列島をふくむ、長大な、島々のつらなりとその海域をもって、「日出ずる処の天子」（自己）に、大義名分上、所属すべき領域とし、

B 中国を中心とする、大陸部をもって、「日没する処の天子」（隋の煬帝）に、大義名分上、所属するところ、とする、「二人の天子による、二つの世界の分割統治」の区画分け支配の提案だったのではないのでしょうか。

そして、その「二つの世界」の接点を探る軍事行動、それが、先の「阿倍臣」一大船団の「肅慎攻撃」、黒竜江河口への接触となったのではないかと思われます。

これに対する、中国の天子（唐）側の回答、それが（白村江の戦）であった。

弥生期以前「日本」の中央は蝦夷国だった。それを要約すれば、次のようになります。

第一。秋田孝季による解説は、彼自身がその依拠史料を記した、一層厳密な基礎史料が出現するまで、一応その真否に対する判断は保留せざるをえない。

第二。しかし、この「日本中央碑」が、八～九世紀の建碑である、とすれば、十分、「青森県を、地理的中心とする」ような地理認識は、彼等（津軽海峡の王者。阿倍氏）に十二分に存在しえたと考えられる。旧石器・縄文及び恵山式（四世紀前後）の地理認識から見て可能なこと。…「年号」と「記・紀」を作った人たち（2019年）平成31年4月を参照。

第三。ここに現われた「日本」は、「大和朝廷呼称の日本」（八世紀以降。厳密には、天智末年〈六七一〉以降）のものではなく、「九州王朝呼称の日本」（右以前）の継承、と考えざるをえない。

第四。「阿倍臣」は、大義名分上、筑紫の王者（日出ずる処の天子）の輩下（「臣」）の地位にあったけれども、決して単なる「一部将」ではなく、むしろ「蝦夷国の王者」そのものであったと見られる。それが「臣」を称したのは、あたかも、あの「倭王武」が、当時（南朝劉宋）の、中国の天子に対し、「臣」と称した（倭王武の上表文。『宋書』）のと同じです。この事実は、何等、「倭国」が独立の国家であったことと矛盾しません。「阿倍氏（安倍氏）」の場合も同じです。

一方では、筑紫の王者（日出ずる処の天子）に対しては、「臣」を称しつつ、他方では、「独立、蝦夷国の、輝ける王者」でありつづけた。その輝ける意義と誇りを表示したものが、それがこの「日本中央碑」における、「中央」の一語だったのではないのでしょうか。

確かに、金属器（弥生期）流入の前、旧石器・縄文と、北海道・東北地方は、日本列島の先進地帯、輝ける一大文明中心だった。その文明伝統を承うけた、「中央」の二字、それは決して単なる虚辞（虚言）ではなかったと思われまます。

このように考察してきた今、平安期の顕昭が『袖中抄（しゅうちゅうしょう）』の中に、「但し田村の將軍征夷の時弓のはずにて石の面に日本の中央のよし書付けたれば石文と云うと云へり」と書いたことは、正しくなかったことが判明しました。

確かに、この四文字は、「えどり直された」観があり、田村將軍がこれに弓のはずで、「えどり直した」などということは、あるいはあったかもしれない。

しかし、彼がこの石碑を「創建」したはずはありません。なぜなら、近畿原点や関東原点の視点では、ここ（青森県）が「中央」とはならないからです。

もしそうでないなら、『続日本紀』以降の、近畿天皇家側の「正史」に、それが麗々しく記載されてもおかしくありません。しかし、それはありませんでした。

さらに云えば、多元史観を証明する「日本中央碑」とも云えるのではないのでしょうか

解説：え - ど・る〔エ - 〕【絵取る】デジタル大辞泉

一度書いた文字や絵の上をさらになぞって整える。また、そっくり写す。

解説：多元史観による多元王朝説とは、古代及び中世の日本列島には複数の王朝と大王が並立・連立していたとする説、及び多元的な見方・考え方。

（了）

## 「年号」と「記・紀」を作った人たち

(2019年)平成31年4月 藤代歴史愛好会 より抜粋

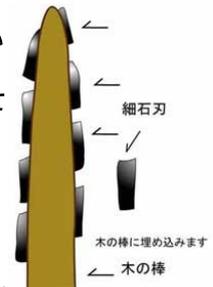
概略：日本列島へ縄文から弥生にかけて、特に弥生期（3000年前～1800年前）には、多くの渡来人がやって来ました。このため各地で争いが起こり、縄文系DNAを持つ男性の人口が3割（Y染色体Dタイプ）にまで、激減してしまいました。その後西日本を支配した集団が、白村江の敗戦のあと、701年大宝律令の実施（大宝建元）に伴い、倭国から日本国となって、やがて古事記・日本書紀を作り、現在まで改元が継続しています。

解説：縄文人のルーツについて、現在わかっている範囲（考古学）では、まずはじめに、北方（シベリア～サハリン）から20,000年前の北海道へマンモスやナウマンゾウなどを追ってきたこと、その後縄文時代10,000年以上の間に本州へ広がって行ったこと。

北からやって来た人達について、代表的な例をあげると、NHKの日本人はるかな旅(マンモスハンターシベリアからの旅立ち：2000年放送)では、日本で発掘された縄文人のDNAと国立遺伝学研究所DNAデータバンクとの照合の結果、発掘された(取手市中妻遺跡出土)人骨化石が、縄文人29人中17人のmtDNAが現在のシベリア先住民民族ブリアート人と一致したことが報告されていました。(また、2018.3.17BS-TBS 諸説あり！でも「縄文人のルーツはシベリアのマンモスハンターだった」との放送がありました。)

居住地の近くには23,000年～20,000年前の寒冷期のマリタ遺跡(1928年発掘)があり、そこで使用されていた石器(右図再現：細石刃:ハイクテク替刃「マイクロブレード」やりの先の両側に付け破損したら交換が可能)が、20,000年前の北海道千歳市柏台I遺跡で発見されたこと。つまりマンモスなどを追って、北海道へ移動していたこと。この頃をピークに日本全体に遺跡が分布していることなどが放送されました。

取手市の細石刃については、埋蔵文化財センター第45回企画展(2019.2.15～4.21)の中で、1996年～1997年の柏原遺跡(ゆめみ野)発掘調査により、旧石器時代(BC30000～BC12000)の細石刃工房跡から4つの細石刃製作跡が発掘された事、また再現された細石刃のやり(右図)等、旧石器時代の狩猟具や出土品の説明がありました。



また最古の土器は、シベリア・アムール川流域(ガーシャ遺跡：13,000年前：厚く桶型)が発見されていますが、日本でも東京都新宿百人町三丁目遺跡では、更に改良された煮炊き用土器(12,000年前：薄く底が尖っている)が発見されていること。これによって18,000年前頃からの急激な地球温暖化によって、日本の環境は草原から森林化していった。このため全ての動物は小型化していったこと。これらに対応すべくやりから弓矢へ発展・発達したこと。森林からの恵みを得るために生食だけではなく、これまで焼いても生でも食用にならなかったどんぐりなども(世界に先駆けた)土器の発達によって煮炊きし、食用にできたと考えられていることなどがわかってきたこと。そして世界の文明が農耕社会に移行したあとも、豊かな環境に恵まれ10,000年以上日本独自の縄文時代が続くこととなります。有名な三内丸山遺跡では、栽培していたと見られる大規模な栗林や約5,500年前～4,000年前の大規模集落跡や大型堀立建物跡などが見つかっています。

南からやって来た人達について、代表的な例をあげると

9,500年前の鹿児島上野原遺跡(1997年発掘)が、鬼界カルデラの火山灰の中から発掘された。東日本では弥生時代から使用が始まったとされる、壺型土器(貝殻文様：7,500年前)を他の地域より5,000年も前に使用していたこと。また丸木舟を作るとき使用する丸ノミ石斧「鹿児島椿ノ原遺跡(かこいのほら)」も発見されている。その後6,300年前になって鬼界カルデラの大噴火により南九州一帯が火山灰に埋もれてしまったことなどがわかっています。しかし4,500年前の東京多摩ニュータウンNO.72遺跡では、木材を伐採するように改良された椿ノ原遺跡などの南九州系統(右図：摩製石器)の石斧149本などの道具が発掘されました。これは南九州系統の技術や人達が関東まで来ていたこと。そして大きな社会を形成していたと考えられることができます。



解説：鳥取県青谷上寺地遺跡 平成10年から3年3か月の期間をかけて、延べ約55,000㎡が発掘調査され、約5,300点、人数にして約109体分の人骨が出土した。今回新たにチームを結成し分析した。人骨から抽出された31個のmtDNAは1個を除くすべて大陸系で、C14測定法により2世紀に北九州からの伝播ではなく大陸から集団で直接やって来た可能性大であるという。朝鮮半島、中国との直接交流があったとされている。大陸からのmtDNAグループは「Cx1 Gx1 D4x15 D5x1 N9ax4 B4x2 B5x2 N7bx4」であり、多種多様(人口密集地を想定させる)で、列島内で混血していない。これらが直接青谷上寺地遺跡へ来ていたものと判断された。

「2018.12.23NHKE 丸・サイエンスZERO 国立科学博物館 篠田謙一、国立歴史民族博物館 藤尾慎一郎」

解説：ミトコンドリア-DNA【ミトコンドリアDNA】細胞内のミトコンドリア内に存在するDNA。核DNAに含まれるDNAに比べて小さく、塩基対の数も小さい。母親由来でしか受け継がれないため、現生人類の母系祖先を遡っていくと、共通の一人の女性祖先ミトコンドリアイブにたどりつくことが知られている。ミトコンドリアゲノム。

解説：Y染色体【Y chromosome】性染色体の一。雌が同型、雄が異型の性染色体をもつ場合に、雄のみがもつものをいう。ヒトでは強い男性決定因子をもつ。